

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370478

研究課題名(和文)クメール語の助詞の意味機能に関する記述的研究

研究課題名(英文)A Descriptive Study on particles in the Khmer Language

研究代表者

上田 広美 (UEDA, HIROMI)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：60292992

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：クメール(カンボジア)語は、日本語と異なり格助詞(ガ、ヲ)を用いないが、主題を表すハや追加を表すモにあたる助詞を用いることがある。本研究は、クメール語資料から収集した用例を分析し、これらの助詞がどのような環境で出現し、どのように用いられるかを考察した。研究過程では、用例分析及び対象研究の手法について、海外研究者の協力を得た。本研究の主な成果は、雑誌論文で発表された他、教材として出版され、外国語教育面において今後社会に還元される。

研究成果の概要(英文)：This study examines the usages and meanings of particles in the Khmer language, extracted from the corpora that include novels, essays, scenarios and speeches. The Khmer language has no case particles but there are some final particles typically located at the end of clauses. This study mainly investigated the collocation patterns of the topic marker particle “koo” with the final particle “dae.” In the research process, Cambodian and Thai researchers collaborated to provide advice on the corpora and on the method of analysis. The main result of this study was published in a journal article and also as a new learning material for learners of Khmer as a foreign language.

研究分野：言語学

キーワード：クメール語 カンボジア語 助詞 文末詞 とりたて詞

1. 研究開始当初の背景

(背景)

クメール(カンボジア)語は、類型論的には孤立語に分類され、語形変化はなく、述語である動詞句を中心とする語順によって、文の意味が決定される。基本的に、否定辞、連用詞などの助詞は実詞に前置される。

クメール語に格助詞は存在しないが、手段、経路、場所を表す語は、名詞に前置される。しかし、この種類の語は、動詞としても用いられる語であり、助詞としての前置詞ではなく、動詞の連続であるとも考えられる。先行研究では、クメール語の助詞の定義と種類について、それぞれ異なる範囲が示されているが、本研究では、否定辞を付加できる語は、実詞であると考え、考察の対象としない。

助詞の種類を大別すると、実詞に前置される否定辞、連用詞、本研究で主に調査する「とりたて詞」と、文末に位置する文末の助詞になる。の連用詞のうち、未然、進行を表すアスペクト標識の語については、本研究代表者が、平成23～平成25年度の科学研究費補助金基盤研究(C一般)「クメール語のテンスとアスペクトの体系に関する研究」で、動詞との共起制限、文脈的な出現環境について調査した。

の文末の助詞は、クメール語の基本語順である[主語+述語+補語]以外の構成要素として、補語に後置され得る一群の語である。必ずしも文末にのみ現れるとは限らず句や節の末に付加される助詞であるが、先行研究に従い、「文末の助詞」としておく。

この文末の助詞については、「文もしくは節の末尾に現れること、複数の文末の助詞が共起し得ること」という定義以外は、先行研究によって文末の助詞として挙げられている語も一致しないが、文体の差によらず出現する、追加表現、否定強調表現、肯否疑問表現、命令表現について主に論じられてきた。

(動機)

一方で、に含まれる「とりたて詞」と、に含まれる「追加表現」の文末の助詞は共起する頻度が高いにもかかわらず、統一的に研究されてこなかった。

もっとも頻度が高い「とりたて詞」としては、日本語の「も」「すると」「ば」に相当する用例の多い語 koo (クメール語は固有の文字を用いるが、以下、クメール語の語彙は簡易翻字で表す)があり、文法解説書では、「とりたて」と「接続」の二つの機能に分類されることが一般的である。出現環境としては、単独で出現することも、他の接続詞と共起することもあり、また、「追加表現」の文末の助詞とも共起する用例が多く観察される。

この「とりたて詞」koo は、出現頻度が高いにもかかわらず、詳細な出現環境や共起制限、「とりたて詞」の有無による意味の差異について、明らかにされてこなかった。とり

わけ、「追加表現」の文末の助詞 dae との共起については、どのような場合に共起する必要性が生じるのかが明らかではない。

以上のことから、本研究代表者自身も含め既存の研究者が取り上げてきた助詞を整理し、クメール語の助詞の体系を明らかにする本課題「クメール語の助詞の体系に関する研究」を着想した。

2. 研究の目的

本研究は、クメール語の助詞の意味と機能について、先行研究で明らかにされてこなかった「とりたて詞」を中心に統語的観点から調査し統一的に記述することを目的とした。国語研究を行うカンボジアの高等教育機関とも協力し、また、音形、用法ともに類似の「とりたて詞」を有するタイ語の先行研究も参照しつつ、次の2点を調査した。

・主題の後に出現しやすい「とりたて詞」と文末の助詞の共起関係

・「とりたて詞」が有するとされる接続機能
本研究で対象とする助詞の用法は、言語教育において、学習者の誤用がもっとも多く観察される課題でもあることから、本課題の成果は、クメール語文法研究の分野にとどまらず、言語教育にとって有用な文法記述を目指した。

3. 研究の方法

本研究は、まず、近年のクメール語資料から助詞を含む用例を収集し、助詞の出現頻度とその環境を調査した。言語資料となるデータとして既に蓄積されていた以下の3種類を利用した。

・カンボジア及び日本での調査協力者へのインタビュー録音による口語資料
・初等及び中等教育の国定教科書(国語科、社会科)
・会話文を多く含む現代文学作品(小説、戯曲、自伝、随筆、ノンフィクション)

さらに、クメール語が固有の文字を用いることから簡易な検索利用に制限されるものの、本研究期間の3年間で、調査協力者、著作者の了解のもとに、随筆集を中心として、検索可能なコーパスを作成した。そのコーパスを利用してクメール語と日本語の対訳からの用例収集を試みた。

調査の過程では、クメール語資料の選定、収集及び用例の分析に関して、外国語としてのクメール語教育の経験をもつカンボジア人海外研究者2名の協力を得た。また、研究の手法については、系統は異なるものの類型的にはクメール語と同じく孤立語であり、本研究の研究対象である「とりたて詞」と音形、用法ともに類似の語彙を有するタイ語の母語話者であるタイ人日本語研究者2名から、外国語教授法への応用の観点からの指導と助言を得た。

さらに、成果の還元として、研究期間中、海外共同研究者を研究拠点である大学に招

へいし、日本語との対照研究の観点から助詞を考察した講演、日本語教育への応用の観点からの「とりたて詞」と文末の助詞に関するワークショップを行った。

4. 研究成果

(研究の主な成果)

研究期間を通じて、クメール語資料の用例から、助詞を含む用例を選んで分析し、「とりたて詞」koo 及びその「とりたて詞」と最も共起しやすい文末の助詞 dae を中心に考察した。主な成果としては、研究期間の2年目にクメール語の「とりたて詞」koo と文末の助詞 dae の用法に関する論文を執筆し、主な研究目的である、1) 主題の後に出現しやすい「とりたて詞」koo と文末の助詞 dae の共起関係、2) 「とりたて詞」koo が有するとされる接続機能、の2点について、研究成果を発表できた。詳細を以下に記す。

クメール語の助詞について、追加表現とされてきた文末の助詞 koo の意味機能を中心に検討した。まず、先行研究をもとに、文末の助詞およびとりたて詞とされてきた助詞 koo について再検討し、次に、先行文脈を考慮しながら、文学作品を中心とした資料から文末の助詞 dae の用例を収集し分析した。koo と dae の頻度及び共起数は以下の通りである。

dae 例	koo と共起	資料	頁数	出版年
72	19	VBS	185	1955
24	23	PSP	156	1960
47	10	KLP	129	1960
23	11	SPT	85	1965
42	7	CPN	101	1969
68	28	JSR	197	1967
35	13	CKK	34	200?
50	25	KPM	32	2000
19	11	PNP	26	2003
15	7	KTH	52	2007

先行研究で述べられている通り、クメール語は、文末に位置する語句(実詞)ほど聞き手にとって予想し難い情報である。しかし、この基本語順に反して、述語部分が聞き手にとって予測可能な場合に、文末の助詞の dae が後置されると考えられる。従って、文末の助詞 dae は単に文脈への追加機能をもつのではなく、koo に先行する述語の内容について、追加される要素と同類の状況が存在することを前提としており、その述語の表す内容は、聞き手にとって予想可能である。同類の状況が存在するという前提が文脈中に明示されない場合に用いられる dae は口語に多い。同

じく追加の機能をもつとされる類似の文末の助詞 phong と異なり、dae は継起的もしくは付随的な状況を表し、同時性をもたず、また、複数の要素を追加することはできない。

一方 koo は、先行文脈からの接続を表すため、そのような接続関係を表さない文や、文章の冒頭では用いられない。dae と共起する場合にも、先行文脈との接続を示す。逆に、追加される要素がない場合には、koo のみで用いられ、文末の助詞 dae は必要としない。koo も dae もどちらも先行文脈を必要とするという共通点があることから、共起しやすいのだと考えられる。どちらもその性質上、文章の冒頭では現れない。

以上の研究の結果明らかになったのは、以下の点である。

- ・文末の助詞 dae は先行する述語の内容について同類の状況が存在することを前提として用いられている。
- ・従ってその述語の表す内容は、聞き手にとって予想可能である。
- ・とくに口語ではそのような前提が文脈中に明示されない場合もある。
- ・類似の文末の助詞 phong と異なり、dae は同時性をもつ動作や、複数の要素を追加することはできない。
- ・koo は先行文脈からの接続を表す。

以上の研究成果を言語教育に応用すべく、研究期間を通じて、中級クメール語教育に活用できる講読教科書を執筆し、研究期間終了後(平成 29 年度)に出版した。

(得られた成果の国内外における位置付けとインパクト)

本研究の成果は、クメール語文法の記述研究にも貢献するが、本研究代表者及び海外協力者がすべて高等教育機関の外国語教育の現場にいる教授者であることから、日本におけるクメール語教育、またカンボジアにおける外国語としてのクメール語教育、タイにおける日本語教育の各方面において、広く社会に還元されると期待される。

また、本研究では、海外協力者として、カンボジア人研究者、タイ人日本語研究者の協力を得たが、講演、ワークショップを通じて、その参加者に助詞の対照に関する知見を与えたとともに、海外研究者の研究や言語教育の実践にとっても有意義であったと考えられる。

(今後の展望)

本研究では、文学作品を中心とした書記言語資料を中心に用例を収集したが、koo と文末の助詞 dae との共起関係については、口語では共起しない頻度が高かった。他の助詞についても口語での頻度が異なることが予想されるため、自然会話の言語資料をさらに収集し調査することで、助詞に関する記述をより深めることができると考えられる。

本研究の主な研究成果は、雑誌論文で発表

されたほか、中級用学習書として出版されたが、研究のために収集された用例や構築された簡易コーパスは、助詞以外のクメール語研究にも利用可能である。今後の展望としては、まず、次年度以降に予定している動詞の下位分類の研究に資料を利用予定である。また、日常的に外国語としてのクメール語教育活動を行っている本研究代表者によって、一般向けのクメール語文法書作成のための資料として使用されることで、社会・国民一般に対して広く還元される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

上田広美、クメール語の文末の助詞 dae について、慶応言語文化研究所紀要、査読無、47号、2016、1-31

上田広美、情報構造と名詞述語文 クメール語、語学研究所論集、査読有、21号、2016、165-169

〔学会発表〕(計 1件)

上田広美、岡田知子、現代クメール語の移動表現、慶應義塾大学言語文化研究所シンポジウム、東京都、2017年3月25日

〔図書〕(計 3件)

上田広美、白水社、カンボジア語 読解と練習、2017、166

上田広美、岡田知子、慶應義塾大学言語文化研究所、東南アジア大陸部諸言語の動詞連続、東南アジア諸言語研究会編、2017、36-71

上田広美、白水社、言葉から社会を考える、2016、25-28

6. 研究組織

(1)研究代表者

上田広美 (UEDA, Hiromi)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：60292992